

産むのも育てるのも大変 —インドネシア・ジャワ島の近代化とリプロダクション

文・写真
松岡悦子

共同研究 ● リプロダクションと家族のオールターナティブデザイン—文化と歴史の視点から (2008-2011)

近代化の中でリプロダクションが大きく変わろうとしているインドネシアを見てみると、日本で何十年前に起こった変化を想像することができる。このプロジェクトでは、インドネシアの変化の中に、日本のリプロダクションの変遷を見い出そうとしている。

村の出産

2011年5月に久しぶりに訪れたジャワ島中部の助産所で、「えっ、まさかそんなこと」と思える事態が進行していた。ルマ・ビダン(助産師の家)と呼ばれる助産所は、助産師のインダルワティが家族と住む家も兼ねていて、2000年には私もここに滞在して出産の立ち会いをさせてもらっていた。そのころは、陣痛が始まった女性がバイクの後ろに乗ってやってくると、インダルワティは近所に住むドクン(無免許の産婆)を呼んで2人で協力して出産介助をしていた。赤ん坊が出るころまではインダルワティが中心になって介助し、生まれた後の赤ん坊を洗って服を着せたり、胎盤を出したり、お母さんの服を着せ替えたりをドクンがしていた。そして翌日からはドクンが1日2回やってきては、赤ん坊を水浴びさせてマッサージをし、スウォドリリングをしていく。スウォドリリングというのは、赤ん坊の手足をぴんと伸ばして布でぐるぐる巻きにする習慣のことだが、ジャワの赤ん坊は生まれるとすぐにスウォドリリングをされ、生後2-3か月までの間、1日に何時間かはスウォドリリングをされている。「その方が赤ん坊がよく眠ってくれて楽だから」というのが若いお母さんたちの言い分で、年取った人たちは「そうしないと赤ん坊の手足が曲がったままになってしまう」と言っている。ジャワでは出産は医療というよりも儀礼と見なされていたので、医学的訓練を受けたビダンと儀礼を行うドクンの組み合わせは、女性たちにとっては心身両面で安心できる絶好の組み合わせだった。だからインダルワティの助産所は人気で、赤ん坊は何の医療的介入を受けることもなく、本当にするすると生まれては母乳を飲み、退院していった。ドクンからすれば、これは免許もちのビダンに仕事を奪われつつある何よりの証拠なのだが、ビダンとの連携はドクンにとっては生き残りの道でもあった。女性たちの方は、実は儀礼の安心感とともにその煩雑さも感じていたから、儀礼を簡素化できる助産所での出産は渡りに船でもあった。これは、出産が儀礼から医療へ移り変わる過渡期にあったときの話だ。



助産所の分娩室。入院中の産婦がいなくて、とても静かだった(2011年5月)。

助産所から病院への搬送

ところが、それから約10年たった今回、インダルワティはこんなふうにするのだ。「今はね、毎月10-15人がここで出産するけれど、病院へ搬送する例がとて増えたの。1か月に13人を病院へ送ったこともあるわ。」まさか、あんなにするすると生まれていた赤ん坊が、どうして半数も病院に行くことになるのか。その疑問に、インダルワティはこんなふうに応えた。「実はね、ガイドラインができて、前回帝王切開を受けた人、双子、逆子、前期破水、予定日1週間超過などの基準に当てはまる妊婦は病院に送らないといけなのよ。その基準でいくと、半分ぐらいがここで産めなくなるの。産科医は出産の30パーセントは医師が介助すべきだと言っているけれど、もう50パーセントぐらいが医者の方に行っているんじゃないかしら。」インダルワティが出産の記録簿を見せてくれたので、私が助産所で産み終えた数と搬送した数を2010年4月から2011年3月までの1年間で数えると、137人が助産所で産み終え、それ以外の70人が搬送されていた。これは、産科医が言う30パーセントを医師が取り上げるべきだという目標値にまさに合致している。

病院に搬送された女性たちはどうなるのだろうか。予定日超過の場合は誘発分娩になり、逆子や前回帝王切開、双子はおそらく帝王切開になるのだろう。日本ではそうなる場合がほとんどだ。一度帝王切開すると次も帝王切開になるので、そうやって助産所で産めない女性たちは増えていくことになる。インドネシア保健省は、このようなガイドラインは死亡率を減らすための措置だと言っているそうだ。たしかに多くの先進国で死亡率は減少し、それは出産に様々な医療が用いられるようになったからだと言われている。しかし、赤ん坊が助産所ですると生まれていた事実を見ていた目に

は、病院に行かなくても無事に生まれる赤ん坊が、リスクが高いと分類されて病院に送られているように見える。リスクが作り出されて、出産を助産師から医師に移し替えるのに一役果たしていると見えるのだ。ガイドラインが導入される前にはリスクとされなかったケースが、ガイドラインによってリスクと分類され、現実には女性たちに帝王切開が行われることでさらなるリスクをうんでいる。お腹を切られた女性たちは次の出産でも帝王切開になり、病院で産まなければ危険な体になり変えられていくからだ。帝王切開で出産した場合、母乳育児をする率も下がることが予想されるので、母乳で育てられる赤ん坊も減っていくだろう。助産師から医師へのお産の移行は、医学自らリスクを作り出し、そのリスクを医学の力で下げると称してそれに国家がお墨付きを与える形で進められている。その中で、女性と子どもの健康が損なわれていくという事態は、ウルリヒ・ベックが言う近代社会がうみ出すリスクそのものである。近代社会は出産を病院に移すことで(そのこと自体は豊かさの印とされた)リスクを増大させ、多くの女性と赤ん坊の健康を損なっているのだ。もちろん数としては少ないながら、母子の命が病院で救われることがあるのも事実だ。

町の育児

ジョクジャカルタのメインストリートにあるショッピングモールの中心部で、マイクから女性の大きな呼び込みの声が聞こえてくる。何の宣伝販売だろうと足を止めると、育児関連用品のようだ。ホテルの会議室のように真っ白い布がかかったイスとテーブルがずらりと並び、女性たちの熱心な姿が見える。横には相談コーナーも設けられ、一対一で専門的な助言をしてもらえる。育児に関する情報が、いつのまに専門家から与えてもらうものになったのだろう。こんなふうに、育児情報がホテルのような高級そうな場所やユニフォームを着た人とセットで提供されるようになると、育児は普通の人にはわからない何か特別の知識のように思われてくる。まさに、育児情報をそのような特別のチャンネルを通じて得られるものにするのが、このような催しのねらいなのだろう。

そこにあったパンフレットを手に取ると、きれいなおもちゃや子ども用グッズに囲まれた母と子が幸せそうに微笑んでいる。それぞれの品物にはポイントがついていて、ポイントを貯めるとこういう物をもらえることがわかるが、何をかうとこのポイントがもらえるのか、どうしたらポイントを貯



ジョクジャカルタのショッピングモールの中に作られた粉ミルク会社のひととき目立つ会場。

められるのかは、パンフレットだけではわからない。パンフレットの文章は「あなたの子どもたちに、 TENTO やミニバイク、鞆、文房具、机、他にもたくさんのプレゼントを用意しています。ポイントをたくさん貯めて、すてきなプレゼントをもらいましょう」となっている。この会社の製品は粉ミルクとその他の栄養補助食品だが、それを買おうとはまったく言わず、ただすてきなプレゼントがほしかったらポイントを貯めましょうと誘っている。帝王切開で体の回復が遅れたママたちには粉ミルクは重宝するかもしれないし、何より普段は見かけないようなかっこいいおもちゃや子ども用品は魅力に違いない。この会社のクラブメンバーになればそんなプレゼントがもらえて、さらに月齢に応じた育児情報も定期的に送ってもらえる。子育ては、子どもが勝手に育っていくのではなく、親が意識的に子どもの発達に応じた働きかけをすることへと変わってしまったのだ。

産み育てることが簡単ではなくなった

産むことや育てることが、どうして簡単ではなくなったのだろう。村ではするすると生まれていた赤ん坊が、いろんな理由をつけて普通に生まれないようになり、町では育児が科学的な知識を用いて行うむずかしいものになってしまった。放っておいても生まれ育った赤ん坊が、いつのまにか大変な手間とお金をかけて、なおかつ成功したり失敗したりするものになってしまったのはどういうわけか。産業化以前の社会では、子どもは周りの大人を見ながら自然に大きくなっていくものと思っていたが、そういう育児を「人並み育児」と呼ぶとすれば、現代人が行う育児はある目標を目指して人と差をつけるための「差別化育児」になっている。産むのも大変、育てるのも大変。今や人々は生き残りをかけて、子育てしなければならなくなっている。社会から置いてけぼりにされないように、子どもが将来きちんとした職に就けるように。もはや子どもが多いほど幸せなどと言って、家族計画を無視する人はいない。2人の子どもをせめて高校までは通わせたい、でなければまともな職には就けないと多くのインドネシアの親が考えている。家族計画は今では生き残りのための手段だ。近代的な生活と出産・育児は相性が悪いのだろうか。

まつおか えつこ

奈良女子大学生生活環境学部。さまざまな地域、とくにアジアのリプロダクションを比較している。出産が病院化する過程で、助産師、医師(医療)、家族の関係がどのように影響し合うのかに関心をもっている。著書に『産む・産まない・産めない: 女性のからだど生き方読本』(編著 講談社現代新書 2007年)、『世界の出産: 儀礼から先端医療まで』(小浜正子と共編 勉誠出版 2011年)など。



粉ミルク会社のパンフレットで紹介されたプレゼントの数々。すてきなものに囲まれた幸せそうな親子の様子が目を惹く。